



祐介の目

No.109

大田祐介（福山市議会議員）

これにより市民病院と医師会の関係は良好となった。地域医療連携の推進により「市民病院に患者を取られる」という民間医療機関の懸念は払拭され、救命救急センター開設にも繋がった。

市民病院の建て替え

前号コラムの田中さんとは気が合うようだ。昭和52年に市民病院が蔵王町の山の上に建設された理由は当時の医師会から民業圧迫の批判を受けたからだ。開院後は赤字続きで身売りの話さえ出たというそれを救ったのが山陽自動車道の開通であった。至近の場所にインターチェンジが完成し、工事の残土により病院周辺に駐車場も整備できた。

平成9年、浮田元院長の回想によれば380床増床計画を当時の医師会長が待ったをかけた。当時の会長とは私の父であり、市民病院に出向いて市民病院の問題点について講演会まで開催した。その結果①病診連携ネットワークを基本とした高度・特殊医療の推進②3次救急体制に向けた基盤整備③病院運営の効率化と改善の3点を骨子とした書面を提出し、増改築における医師会の了承を得た。

た。経営状況も近年12年連続赤字を計上しているが、市民病院は毎年10億円を超える一般会計からの繰り入れがある上に、土地建物設備に対して固定資産税を払う必要はない。しかし、建設から40年以上が経過し、市民からバスの減便、周辺道路の渋滞等のアクセシ性の悪さ、周辺に薬局が無いと指摘されるようになった。現在地に建て替えれば今後また40年間山の上に留まることを意味する。私はこの際旧体育館の跡地にでも移転新築し、医療センターや周辺の民間医療機関と合併・連携し、倉敷中央病院や川崎医大のような1000床規模の病院を目標してはと議会で何度か提案したことがある。

市民病院は新型コロナウイルス感染症の対応においても尽力され、市民の安心安全に貢献している。しかし、建て替えて200億円以上の経費をかけても山の上にあるばかりに市民が離れることの無いようお願いしたい。